

# 陸前高田市文化遺産調査における ESD 教材開発 (10)

## － 中学校における自分事化できる防災・減災教育の方向性 －

井阪愛子

(奈良教育大学 専門職学位課程 (教職大学院))

川田大登

(奈良教育大学 国語教育専修)

木幡美幸

(奈良教育大学 社会科教育専修)

大西浩明

(奈良教育大学 ESD・SDGs センター)

The Tenth Teaching Material Creation for Education for Sustainable Development at Researching Cultural Heritage in Rikuzentakata City:

Direction of Disaster Prevention and Mitigation Education in Junior High Schools

Aiko ISAKA

(Professional Degree Program (in Education), Nara University of Education)

Hiroto KAWADA

(Japanese Education Specialization, Nara University of Education)

Miyuki KOHATA

(Social Studies Education Specialization, Nara University of Education)

Hiroaki ONISHI

(Center for ESD and SDGs, Nara University of Education)

**要旨:** コロナ禍によって2年間中断した陸前高田市文化遺産調査が再開された。ESD 防災班は、見学や聞き取り調査などを経て、何度も津波災害を経験している陸前高田の人でさえ、いざというときに正しい行動がとれないということを知り、防災・減災についてより自分事として捉え、命を守る行動がとれる人になることの重要性を改めて認識した。本稿では、奈良県内の中学校2年生を対象に、年間を通じて様々な教科と連携した総合的な学習の時間に、防災・減災教育を位置付け、より自分事化でき、さらには中学生自身が積極的に地域と協働できることを目指した「防災教育プロジェクト」を提案する。

**キーワード:** 持続可能な開発のための教育 Education for Sustainable Development

防災・減災教育 Disaster Prevention and Mitigation Education

自分事化 Own affairs

### 1. はじめに

奈良教育大学では、2012年度より毎年陸前高田市文化遺産調査団を結成し、岩手県陸前高田市周辺の文化遺産調査などに取り組んできた。コロナ禍により、2020年度、2021年度は中止を余儀なくされたが、今年度は本学教員3名、学部生3名、大学院生2名、教職大学院生1名からなる調査チームで、9月7日～10日にかけて、文化遺産調査班と ESD 防災班の2班に分かれて活動を行った。主な日程は表1の通りである。本稿は、

ESD 防災班として参加した4名による研究報告である。

ESD 防災班の学生(川田、木幡)はいずれも中学校教員を目指しており、教職大学院生(井阪)は現職の中学校教員であることから、現在の中学校における防災・減災教育の在り方を批判的に見つけ、真に自分事となり得る防災・減災教育はどうあるべきか、どのような資質・能力を生徒の身につけておかなければならないのか、また、そのためにはどのようなカリキュラムが考えられるかなどを、震災時または震災後の被災地の取組に学び、奈良の地から提案しようとするものである。

表1 4日間の主な日程

	文化遺産班	ESD 防災班
7日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・多賀城跡、多賀城碑見学</li> <li>・多賀城廃寺跡見学</li> <li>・普門寺打合せ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・東日本大震災津波伝承館見学</li> <li>・一本松、気仙中学校跡等周辺の震災遺構見学</li> </ul>
	・陸前高田市教育委員会表敬訪問	
8日	・普門寺調査	・市立博物館副主幹（前市民協働部長） 佐藤由也氏より講話 「陸前高田市の復興状況と地域コミュニティづくりについて」
		・市立図書館長（元小学校長） 菅野義則氏より講話 「防災教育と復興教育について」
9日	<ul style="list-style-type: none"> <li>・普門寺調査</li> <li>・東日本大震災津波伝承館見学 その他、周辺の震災遺構見学</li> <li>・常膳寺見学</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・仮設博物館の見学・講話 「被災資料の復元状況などについて」 市立博物館長 松坂泰盛氏</li> </ul>
		<ul style="list-style-type: none"> <li>・旧吉田家住宅主屋復旧状況見学 教育委員会副主幹 佐々木敦美氏 文化財係学芸員 曳地隆元氏</li> <li>・市内震災遺構（津波石碑）見学等</li> </ul>
10日	・藤里毘沙門堂見学	
	・豊田館跡想定地見学	
	・岩手県立平泉世界遺産ガイドセンター見学	
	・中尊寺見学	
	・毛越寺見学	

## 2. 調査から見てきたこと

今回の調査を経て、明らかになったことが二つある。一つは、人は頭で理解してもいざそのときになったら正しい行動をとることは難しいものだという事。もう一つは、万が一のときにその正しい行動をとるためには、単発的な訓練や学習では身につかないものであるということである。

### 2.1 頭では分かっている

市立図書館長の菅野義則氏の講話において、地震発生時の同氏の動きを語られた部分があった。要約すると次の通りである。

当時、教育委員会に籍を置かれていて、地震の日には出張で内陸の方に行っておられた。大きな揺れを感じ、「対応のため戻らなければならない。」と考え、市役所に戻ろうとされた。市役所は沿岸部にあり、津波が最上階まで到達するほどの低い場所にあった。しかし、津波が来るからその場にしようとは、そのときは考えられなかったそうだ。市役所に向かっていったとき、下から走って上がってくる小学生たちとすれ違ったが、それでもさらに下に行ってしまった。そうすると、目前に津波が来ていることがわかった。その瞬間、慌てて引き返すことにし、ようやく高いところに向かって逃げるといった行動になっ

たそうである。

教員であり、まして指導的な立場にあり、これまで地震と津波の関係については痛いほど知っていたにも関わらず、「人間というのは、分かっているにもかかわらず正しい行動がとれない。」と、自責の念とともに話された。

### 2.2 自分事化できていない防災・減災教育

東北の教員でもこうなるのである。奈良ではどうだろうか。毎年1回ある地震想定避難訓練も、どこまで真剣にやれているだろうか。他地域に比べて災害そのものが少なく、内陸部にあり津波には縁遠い奈良の子どもたちが、いざというときにどこまで正しい行動がとれるのかは甚だ疑問である。

おそらくどの学校においても、学校安全計画やそれに基づいた避難マニュアル、学習計画などは作成しているのだろうが、避難訓練が学校行事化するなど、それらが機能しているとは思えず、自分事化されていない防災・減災教育に陥ってしまっていると感じる。学習においても、国語科は国語科で、社会科は社会科で、理科は理科でのように、防災・減災に関わるのがバラバラに行われ、それぞれが単発的なものに終始していることが多いように思われる。

近い将来、南海トラフ地震が起きると言われており、奈良県内においても相当な被害が出る事が予想されている。その中で、正しい行動がとれるかどうかは、命を守るかどうかの分岐点であり、中学生にとっては非常

に大切な学びのはずである。

### 3. 防災教育プロジェクト

そこで、私たちは中学生を対象とした「防災教育プロジェクト」と題して、カリキュラム開発を試みた。

プロジェクトの課題設定を「震災時に命を守る行動ができる人になるために必要なことは？」とした。生徒それぞれが自律システムやメタ認知システムを働かせて地域が持つ課題を自分事と捉えた上で、課題解決のために地域の自然環境や防災についての知識や理解を深め、自らの安全を確保するための行動や、地域の安全に役立つ行動ができるようになることを目指した。そのための方略として、奈良県内中学2年生における、各教科と総合的な学習の時間の往還による防災教育プロジェクトの年間を通したカリキュラム・マネジメントの開発を行うものである。

まず、プロジェクトを「課題設定」「ステージ1～3」

と分け、認知システムのレベル（取り出し、理解、分析、知識の活用）を意識したストーリーマップ（表2）を作成した。「ステージ1～3」をスパイラルに配置することで、履修主義へ偏ることを防ぎ、生徒自らが多面的・多角的に探究的な学習を繰り返すことで、「自身の命を守る行動ができる人から地域の人々の命を守る行動ができる人になりたい、地域の安全に役立つ行動ができるようになりたい。」と価値観の変容を促し、生徒同士や地域の人々との協働的な学習を通して深い学びへつながればと考えた。

具体的には、「課題設定」時から本質的な問いである「震災時に命を守る行動ができる人になるために必要なことは？」を生徒達に投げかけ、「かけがえのない命」を守るためにそれぞれ生徒自身が、今何ができるのか、震災時には何ができるのか、何をしなければならないかを考えさせたい。そのために、東日本大震災時の陸前高田の被害や、昔から陸前高田に伝わる「教訓」を知ることから、私たちの住んでいる奈良県に意識を向けさせたい。

表2 防災教育プロジェクト ストーリーマップ

奈良県中学校2年 防災教育プロジェクト ストーリーマップ				
学習目標： ①過去の震災や今残る教訓の振り返りを通して、自らの安全を確保するための行動ができるようになる。 ②地域が持つ課題に取り組むことを通して、地域の安全に役に立つ行動ができるようになる。 ③自然現象である自然災害の発生メカニズムなど学ぶことを通して、地域の自然環境や災害や防災について知識や理解を深める。				
	課題設定	ステージ1	ステージ2	ステージ3
総合的な学習の時間	【課題設定】 「震災時に命を守る行動ができる人になるために必要なことは？」 ○災害時、命を守るために必要なことは何だろうか？	過去の震災時に人々はどういうように震災に向き合ったか、今に残る教訓を調べてみよう  ○東日本大震災、特に陸前高田市の被害について知り、被害に遭った先人の工夫や想いを知ろう	守られる側から守り行動できる側になる！ 私たちにできることを考えよう  ○奈良県の災害を調べて、自分たちで教訓をつくろう  ○私たちが必要と考える避難訓練を計画してみよう	自分だけで終わらせない！ 地域に貢献できる発信をしよう  ○他学年と地域の人にこの1年の学びを伝えよう  ○地域の人たちと避難訓練を成功させよう
教科との連携	○〈道徳〉 つながる命	○〈社会〉 東北地方について知ろう ○〈家庭〉 ビニール袋で米を炊いてみよう ○〈国語〉 聞き上手になろう ー当時の状況や思いを聞き出すインタビューー 〈国語〉 メディアの特徴を生かして情報を集めよう	○〈保健体育〉 応急手当、心肺蘇生ができる人になろう ○〈家庭〉 家族の住まいを安全・安心に ○〈理科〉 気象現象がもたらすめぐみと災害	○〈国語〉 1年間の「命を守る」教育を通して学んだことを話し合い、壁新聞にまとめよう

奈良県も昔から震災に度々見舞われおり、今に残る教訓が「語り」や「掲示」として伝わっている。地域の先人たちが残した教訓から私たちへの思いを知ること、生徒達も次の世代や地域に自身の学びを伝えたいという意識の醸成につなげたい。

これらの学習は、総合的な学習の時間だけではなく、各教科において連携した取組として進めるため、カリキュラム・マネジメントを行った。例えば、「課題設定」時には、道徳「つながる命」を学習したうえで、「災害時、命を守るために必要なことは何だろう？」という問いを持たせたい。また、「ステージ1～3」においても、国語科、社会科、家庭科、理科、保健体育科などの学習において、本プロジェクトに関連する学習と連携させ、生徒の学びが連続するようにした。

#### 4. 本プロジェクトで期待すること

「ステージ3」にあるように、現状行われている避難訓練を批判的に捉え、義務であり強制される学校避難訓練から、地域が必要とする避難訓練を生徒自らが計画したい、実施したいと意識が高まることを期待する。生徒主体で教員や地域の方々と協働して避難訓練を計画・実施することを通して、地域の一員としての自覚が芽生え、つながりを尊重する態度や他者と協力する態度が育成されることを期待したい。

大きな災害が起こったとき、中学生に課せられる役割が非常に大きいことは、これまでの例からも明らかである。各地において、自主防災組織が生まれ、地域全体での防災訓練などが盛んに行われているが、避難所運営をはじめ、その主役は中学生であることが多い。「ステージ2」に「守られる側から守り行動できる側になる」とあるように、生徒一人一人が防災・減災について自分事として捉え、地域社会に積極的に関わっていきこうとすることは、多大な社会参画であると同時に、地域社会にとっても大きな力となるものである。まさに、学習指導要領で謳う「社会に開かれた教育課程」を具現化したものになると期待する。

#### 5. おわりに

今回の陸前高田市訪問中、陸前高田市教育委員会より、防災教育副読本「明日のために」を提供いただいた。震災から2年後に発行され、市内の小中学生に配布されているという。山田市雄教育長が書かれた「はじめに」に次のような一文がある。



写真1 陸前高田市防災副読本  
「明日のために」

この防災副読本は、「知る」「考える」「助け合う」「未来へ」の4つのまとまりからなり、陸前高田市で起こりうる様々な自然災害、災害時の対応や事前の備え、東日本大震災のときに実際にあった支援・協力、産業や伝統文化、そして新たなまちづくりへの願い等、わたしたちが受け継ぎ語り継いでいくべきことについて、文や写真、図表、イラスト等をふんだんに用いてまとめています。

近年、災害が頻発化、甚大化する中で、どの自治体においても同様のテキストなどが作成されることが望まれるが、まずは学校教育の中で地域に応じた、且つ自分事と捉えられる防災・減災教育を推進することが求められる。

今回提案した「防災教育プロジェクト」については、今後連携する教科の具体的な学習計画も作成、実践し、その検証を図っていきたい。

#### 参考文献

坂本和音・加藤真由・北村恭康(2020)「陸前高田市文化遺産調査におけるESD教材開発(9)―ハザードマップの情報から防災を考える―」奈良教育大学次世代教員養成センター研究紀要第6号 p.165-171

矢ヶ崎典隆ほか編(2021)「新しい社会 地理」東京書籍 p.252-253

陸前高田市教育委員会(2013)「陸前高田市防災教育副読本：明日のために」 p.1.